

「変な矛盾したことを言ってる」昭和天皇の抵抗を押し切り宮中に“送り込まれた”のは…側近が知る天皇の“本音と愚痴”

#1 河西 秀哉 2023/08/15

元銀行家で民間から“改革”のために初代宮内庁長官に就任した田島道治氏。敗戦後の1948年から1953年まで昭和天皇に仕えた。手帳や日記帳、「マル秘」と書かれたノートなどには、昭和天皇の発言や二人のやり取りが詳細かつ膨大に記されていた。この夏、貴重な史料が全7巻の『昭和天皇拝謁記』（岩波書店）として完結。編集委員をつとめた名古屋大学大学院人文学研究科准教授の河西秀哉氏が、読みどころを深掘りする。（全2回の1回目／[後編](#)に続く）



宮中改革のために派遣された人物

1948年6月5日、宮内府長官に田島道治が任命された。彼は芦田均首相から長官として送り込まれてきた人物であった。日本国憲法によって象徴となった天皇制を実質化するため、「旧憲法的感覚」を有した天皇側近を一掃することが片山哲前内閣から課題となっていた。そこで、GHQの宮内府の機構縮小要求（それを踏まえ、宮内府は1949年6月に総理府の外局としての宮内庁と改称される）を背景に、芦田は田島を長官にする人事案を天皇の抵抗にもかかわらず押し切った。田島は宮中を改革するために派遣された人物だったのである。

ADVERTISEMENT

田島は元々銀行家で、長く民間におり、宮中の経験はなかった。その彼が、日記とは別に天皇と拝謁（面会）した時の会話を詳細に記録した「拝謁記」を残している。それは、長官となって約8ヶ月後の1949年2月3日から、長官として最後の拝謁となる1953年12月16日までの内容が、会話調で記されている。昭和天皇の発言がここまで詳細かつ膨大に記された史料はこれまでにない。「拝謁記」は『昭和天皇拝謁記』として岩波書店から出版された（第一巻～第五巻が「拝謁記」、第六巻がその時期の日記、第七巻が田島宛書簡や書類など）。

その「拝謁記」であるが、始まった翌日の1949年2月4日に次のような記述がある。

〈昨日の七十五才の人の退位請願は、先年海水の写真を見ての投書ありしが、それと類似のことで（御軫念の様子恐縮）御退位問題は現在問題残り居らず、**何等此際実際問題にあらざれど**、一部に真

面目にかゝる問題を考える有識者あることは事実であります、と御参考の為めにと思ひ申上げし所、其辺御了承相成る。〉

どうも、ある老人から退位請願が宮内府に寄せられた。田島は「御参考」のためにそれを天皇に報告したのである。()のなかは田島の感想であるが、「御軫念の様子」とは天皇がそれに対して心配している様子を示している。

これに対して、2月10日の拝謁の時、天皇は「七十五才の退位希望の書面は全部読んだが、腑に落ちない事がある」と話を切り出した。天皇が一国民の請願の書面を読んだというのは興味深い。まさに、その書面の内容を心配していたからだろう。#1

• #2

「この部屋の中だけのお話でございます」昭和天皇の“過激な一言”…秘録に残る“戦争の悔恨”と“多くの人々への批判”

#2 河西 秀哉 2023/08/15

元銀行家で民間から“改革”のために初代宮内庁長官に就任した田島道治氏。敗戦後の1948年から1953年まで昭和天皇に仕えた。手帳や日記帳、「マル秘」と書かれたノートなどには、昭和天皇の発言や二人のやり取りが詳細かつ膨大に記されていた。この夏、貴重な史料が全7巻の『昭和天皇拝謁記』（岩波書店）として完結。編集委員をつとめた名古屋大学大学院人文学研究科准教授の河西秀哉氏が、読みどころを深掘りする。（全2回の2回目／[前編](#)から続く）



多くの人々に対する昭和天皇の批判

昭和天皇が**戦争責任を痛感し、退位**をも含めて考えていたことが田島道治宮内府・宮内庁長官が残した「拝謁記」からはわかる。では、**戦争責任は自分一人にあると天皇は考えていたのだろうか。**

そうではない。「拝謁記」には**多くの人々に対する昭和天皇の批判が展開**されている。田島と密室での会話だけに、その語り口はかなり正直でもある。

特に、**陸軍に対しては厳しい**。1949年9月7日、「**自決者は大体戦争犯罪人〔に〕なるのがいやで自決した**」と天皇は田島に述べた。それは、**本庄繁元関東軍司令官**や**杉山元元陸軍大臣**など、陸軍軍人を想定した会話であった。天皇は自身を「科学的に物を考へる」タイプと考えており、**陸軍軍人、特に皇道派と呼ばれた人々はそうではないと考えていた**ようで、**彼らへの評価は低かった**。それは、**天皇が「日本でもアメリカでも軍人は同じで下剋上、セクシヨナリズム、つくづくそう思ふ」と考えていたから**であった。

このように**軍を「下剋（克）上」と天皇が評する会話**は、「拝謁記」のなかに散見される。天皇にとっては、**軍は大元帥である自らの命令を聞かず、独自で勝手に動く存在と見ていた**のである。そして、**1950年11月7日**、次のような話が天皇から田島になされた。

〈**青年将校は私をかつぐけれど私の真意を少しも尊重しない。むしろありもせぬ事をいつて彼是極端な説をなすものだ。マージャンなど私はしないのにそれをやるなど**>いつた。auction bridge〔トランプのゲーム〕は私はやるけれどもマージャンはしない。私の真意のやうな軍人の精神ならい>が、真崎流の青年将校のやうな軍人の精神は困る〉

これは、**警察予備隊の幹部に旧軍人がすえられるのではないか**という報道に対し、**真崎甚三郎の影響を受けたような者は困る、と天皇が述べている場面**である。**真崎は陸軍皇道派の中心的な存在**であり、2.26事件では無罪となったものの皇道派青年将校の主張に沿った形で事態の収束を図ろうとしていた人物である。ここで麻雀の話が出てくるのは、そうした皇道派の青年将校たちが昭和天皇は夜な夜な麻雀をしているような遊んでいる人物であり、それを糺す必要がある、弟の秩父宮を即位させるべきと主張していたことが念頭にある。

昭和天皇が考える戦争への分かれ道

天皇にとって、**彼らは自分の真意などまったく理解しようとしぬ存在**であった。トランプでも麻雀でも同じではないかと後世の私たちは考えてしまう部分もあるが、ここに**天皇の性格がにじみ出ている**ように思われる。**昭和天皇は正確性を欠いた噂話が展開されることを嫌っていた**。それを率先して行う皇道派の軍人が、天皇にとっては最も嫌うべき存在であった。だからこそ、**自分を理解せず勝手な噂をするような軍**

人たちに厳しく対応してこなかったことこそ、敗戦の原因と考えていたようで、1952年5月30日には次のような話を田島にしている。

〈どうも段々考へれば**下剋上**を早く根絶しなかつたからだ。田中内閣の時に張作霖爆死を厳罰にすればよかつたのだ。〉

1928年に中国奉天近郊で起こった**張作霖爆殺事件**をめぐって、天皇は犯人の**厳罰処分**を求めている。しかし**田中義一内閣**は陸軍や閣内の反対にあったことで方針を転換、曖昧な形で解決を図ろうとした。最終的には**天皇は田中に叱責を突きつけるものの、内閣の方針については裁可する。天皇はこれが戦争への分かれ道となつたと見ていた**のだろう。

戦争責任は陸軍だけにとどまらない。そうした**陸軍に政治家や国民も迎合したと天皇は見**ており、**国民に対しても批判的な意識**を有していた。

それだけではない。**アメリカに対しても批判的な眼を向けていた**ことが「拝謁記」に記されている。1950年12月1日、天皇は田島に次のような話をしている。

「此御部屋の中だけの御話でございます」

〈朝鮮事変の中共介入御心配の御話あり。之は私の勝手のグチだがとて、**米国が満州事変の時もつと強く出て呉れるか、或いは適当に妥協してあとの事は絶対駄目と出てくれ**ばよかつたと思ふとの仰せ。又五五三の海軍比率〔ワシントン海軍軍縮条約の内容〕が海軍を刺激して、**平和的の海軍**が兎に角く、**あゝいふ風に仕舞ひに戦争に賛成**し、又比率関係上堂々と戦はずパールハーバーになつたの故、春秋の筆法なれば Hughes 国務長官〔Charles Evans Hughes チャールズ・エヴァンズ・ヒューズ、元国務長官〕がパールハーバーの奇襲をしたともいへるとの御話故、これは此御部屋の中だけの御話でございますと申上ぐ。〉

かなり過激である。天皇は、1931年の満州事変のとき、関東軍が暴走したことをアメリカがもっと強く批判してくれたならば、その後の軍の暴走は防げたはずだと言っているのである。**自分の大元帥としての責任はここでは欠如していると言われても仕方がない。**

さらに、1922年のワシントン海軍軍縮条約における**主力艦の保有比率が日本に不利なもの**になつたことで、**海軍に反英米感情が高まつたのだ**と天皇は述べる。そして、**正々堂々と戦える戦力を有してい**

なかったから、真珠湾攻撃のような奇襲作戦をするしかなかったと強調して、それはアメリカが引き起こしたものだといえると田島に述べたのである。

さすがに田島もこの発言は相当にまずいと思ったのか、「此御部屋の中だけの御話でございます」と注意しており、その後の天皇がこうした発言を公式的な場でしたことは確認できない。ただ、**天皇がアメリカも含めて戦争責任があると考えていたことは重要**だろう。

たしかに、**昭和天皇が戦争の責任を感じていたことも事実**である。悔恨の感情はあった。ただし、**一身にそれを背負うつもりもなかった。むしろ、多くの人々にもこの戦争を招いた要因があり、自分だけではなくそれらすべての人々が責任を負わねばならないと考えていた**のである。「拝謁記」からはそうした天皇の考え方がよりリアルに伝わってくるのではないか。